

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02136

研究課題名(和文) 近現代彫刻における「表面」の再構築 アントニオ・カノーヴァを起点として

研究課題名(英文) Rethinking about Surfaces on Modern sculpture

研究代表者

金井 直 (KANAI, Tadashi)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：10456494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：彫刻表面の効果に対する関心は、19世紀初頭、アントニオ・カノーヴァ作品の制作・受容においては非常に高かったにもかかわらず、その後継世代が引き受けなかったことを、実作と文献に即し確認。その原因として、1)プロト・モダニズムとしてのプリズモの伸張、2)美術館・写真による新しいイメージ流通、3)アカデミーによる技術教育の合理化、4)王政復古期の保守主義(裸体検閲)、5)モニュメントの流行を指摘。この5点はその後も近現代彫刻の条件・制約を構成することになる。それゆえに、近現代における表面への関心は、それらへの抗力を喚起・内包するものとして捉えることができるだろう。

研究成果の概要(英文)：Although the interest in the surface of Antonio Canova's sculpture was revealed very well at the beginning of the 19th century, his followers were almost unconcerned with the sculptural surface. The reasons can be supposed as follows: 1. the influence of "purismo," 2. radical change of the image distribution by museum and photography, 3. rationalized education system by academies, 4. conservatism of the restoration period (censorship to nude), 5. fever to the monument. These aspects will constitute the condition of modern-contemporary sculpture. Therefore, various interests in surfaces in modern-contemporary sculpture might be recognized as the objection or incongruity to the aspects.

研究分野：美学美術史学

キーワード：新古典主義彫刻 彫刻の表面性

1. 研究開始当初の背景

美術史、特に西洋近代美術史の言説が、絵画をモデルとして形成されてきたことは否定できない。一般的な鑑賞経験においても、メディアによって流通する情報量においても、絵画の優位は今なお揺るがぬところだろう。比して彫刻をめぐる言説は限定的であり、作家主義的な解説と理解が、なお残存する状況も認められる。もちろん絵画との差異を際立たせることで、彫刻の領分を確保しようとする試みも繰り広げられるが、えてしてこれは彫刻を触覚の芸術とする伝統的なジャンル論のヴァリエーションに転化し、場合によってはさらに、実感・経験を尊ぶ近代的な作家主義に舞い戻る。

もちろん、より精緻な、あるいは拡張的な研究領域では異なる状況も確認できる。20世紀後期から、美術史学の領域では、アカデミーや新古典主義の彫刻に関する研究が増加し、プロト近代の彫刻史の実相が明らかになりつつある。また、現代美術史の領域では、R・クラウスらによるロダニズムの解体や彫刻概念の拡張によって、フォーマリスティックな、また、作家主義的な近代彫刻の言説の優位は、ほぼ失効した感がある。この傾向は、近年においてはさらに、美術の環境化、すなわち、ランドアート、インスタレーション、リレーショナル・アート等の登場ともあいまって、彫刻というジャンルそのものの「終焉」をほのめかすに至っている。

こうした研究の精緻化と拡張は、しかし、現状、一体的には認識・展開されてはおらず、学としての美術史と学際的な現代美術研究に分断されがちである。結果として、その間隙において、上述の近代的な彫刻観への回帰・滞留を相変わらず受認する状況も認められる。

研究代表者は年来、新古典主義の彫刻家アントニオ・カノーヴァの研究を続けており（学位論文『美術史学におけるアントニオ・カノーヴァの位置』、1999年）、近代のフォーマリスティックな彫刻観には還元されぬ、彫刻の物質的側面と鑑賞（受容）側面の相関を一貫して論じてきた。特にカノーヴァ作品の表面は、作者の「仕上げ l'ultima mano」によって成り立つ場所とされながらも、制作・鑑賞の実際においては、助手や鑑賞者の多様な関与を待つ、間主観的な領域として体験されてきたことを指摘してきた。

一方、現代美術の領域では、展覧会キュレーションや、批評活動を実践しており、とくに国内外の彫刻家との協働・討議の実績・機会を多く有している。

つまり、研究代表者は上記の「研究の精緻化と拡張」を接続・横断しうる広範な活動を実践しており、それゆえに「近代的な彫刻観への回帰・滞留」を回避する論点を常に呈示できる立場・環境にある。

2. 研究の目的

本研究は、

(1)彫刻家、A・カノーヴァの制作方法および、同時代の彫刻鑑賞の実態分析を起点とし、従来の彫刻史において看過されがちであった、あるいは作家の主観性の発露として単純化されがちであった作品表面の多義的な性質（物質性・媒介性・通態性・間主観性）を明らかにする。

(2)また、そのカノーヴァ的表面の失効の過程・原因を調査分析する。

(3)そのうえで、19世紀後半から20世紀中葉に形成された近代彫刻の言説を批判的に再検証する。

(4)さらに現代美術の動向にも呼応する新たな論点の獲得、批評言語の構築を目指す。

3. 研究の方法

(1)カノーヴァおよび後続世代の作品調査・分析、関連文献調査
英国およびイタリアのコレクションを重点的に調査する。とくに作品表面の状態観察、関係者への聞き取りを重視する。

(2)近代彫刻に関する作品調査・分析および関連文献調査
主にアルトゥーロ・マルティーニの作品・著作の分析を進める。

(3)現代彫刻に関する作品調査・分析、関連文献調査
ヴェネツィア、シドニー等の現代美術展の現地調査をおこない、関連作品を調査する。また、実際に展覧会を企画・運営することで、作品・作者・鑑賞者と直に接触し、討議を開く実践研究を試みる。

(4)総合的分析
(1)～(3)を接続する論点を抽出し、近代初期から現在にいたる彫刻の表面論の可能性を検討する。

4. 研究成果

(1)カノーヴァ的表面の発現と消失

カノーヴァ作品の分析

カノーヴァ作品の現状調査をロンドン、ヴィクトリア&アルバートミュージアムおよびチャッツワース、デヴォンシャー・コレクションで実施。前者においてはカノーヴァの最重要初期作品である《テセウスとミノタウロス》と後期の代表作《三美神》、後者では最晩年の作《眠るエンデュミオン》について、とくに表面の仕上げに注目して精査し、あわせて担当学芸員と情報交換をおこなった。改めて確認されたのは、制作時期による表面の相違であるが（晩年に向かうにしたがって彫琢の度合いを増す）、同時に、オリジナル表面の不在ないし見極め難さという問題も再認識された。このこと自体、カノーヴァ作品の受容史を検討する上で、重要な事実・課題となるだろう（1990年代のカノーヴァ修復について、M・コルダールは、それが純白 *candore* や煌めき *lucichio* を求める過剰介入であったと指摘している）。一方で、現状、過剰な修復を受けることなく、表面に色調の変化を残す像もあり（例：プレーシャ、トジオ・マルティネンゴ絵画館の《エレオノーラ・デステの肖像》）、それらの保存・維持を可能にするための情報・技術の共有が、目下きわめて重要である。

以上のような実作の検討とあわせて、M・ミッシリニ編のカノーヴァによる彫刻論（*Della vita di Antonio Canova*, 1824 所収）の翻訳を進めた。

ポスト・カノーヴァの彫刻作品分析

カノーヴァの後継彫刻家、後期新古典主義彫刻家の作品調査を、ローマ国立近現代美術館、プロトモテカ・カピトリナ、デヴォンシャー・コレクション、シドニーNSW 美術館等でおこない、図像・様式の特徴・傾向の把握、像表面の処理について、確認を進めた。

関連する多くの彫刻家のなかで、とくに注目したのが、ジュゼッペ・デ・ファブリスとアダモ・タドリーニである。前者はカノーヴァに最も近い卓越した彫刻家として同時代から高い評価を得、カノーヴァ没後には、ローマ、ヴェネツィアにおけるカノーヴァのモニュメント建立に参加。あるいはアカデミア・ディ・サン・ルカ学頭やヴァティカン美術館館長等の要職を務めるなど、カノーヴァの公的イメージに強く接近した彫刻家であった。一方、タドリーニは、カノーヴァのスタジオを支え続けた有能な彫刻家であり、カノーヴァ名義の作品のほか、そのコピー、あるいはオリジナル作品も手がけるが、全体として、カノーヴァ・イメージとの一体化・同一化を引き受けた彫刻家と言える。対照的なデ・ファブリスとタドリーニを並置することによって、ポスト・カノーヴァ期の彫刻制作の実態、さまざまな影響の発現を、対比的に幅広く分析することが可能となった。これは研究代表者の独自の視点・成果である。また、その分析の結果として、カノーヴァ派と称する彫刻家たちにおいてすでに、作品表面へ

の意識・関心が著しく減退していることを確認することができた。

以上のような、作者・作品に即した研究に加え、当時の彫刻実践を知る上で重要な著作である F・カッラドーリの *Istruzione elementare per gli studiosi della scultura*, 1802 の翻訳を進めた。

(2) 表面論の再構築

失われた表面

作品研究に先立ち、彫刻の表面をめぐる近年の論点を確認した。すなわち、R・クラウスによって提起された近代彫刻の表面をめぐる議論（ロダンを起点とする）が、今世紀に入り、A・ポッツによって再検討され、ミニマルアートとともにカノーヴァ作品の表面の現象学的性格が主張される（カノーヴァによる表面の先取）。この観点を引き受けながら、J・パディエは、カント美学（主観的普遍性）を援用しつつ、カノーヴァの表面の間主観的な性質を指摘する。これに対し、D・バインドマンは、むしろカントの自律美学的側面を強調しながら、カノーヴァとそのライヴァル、トルヴァルセンとのあいだにある、20 世紀のミニマリズムとモダニズムに類する対立構造を主張。自律美学に拠るトルヴァルセン（モダニズム）側の伸張を指摘する。ここにおいて、カノーヴァ彫刻が実現しえた表面は、実作においても、鑑賞者の関心においても消失・失効し、約半世紀後のロダンによる再賦活を待つことになる。

以上のように、先行研究を彫刻の表面史として整序・確認したうえで、研究代表者は、カノーヴァ・ロダンの間隙で生じた表面失効の原因・背景をより具体的に、史的文脈に即して検討することになる。

表面失効の原因・背景

(1) において確認したポスト・カノーヴァ世代の表面にたいする関心衰退は、(2) に示したバインドマンの研究によっても裏付けられるが、その原因・背景は何か。バインドマンによれば、プリズモないしプリミティブ趣味の台頭である。加えて研究代表者は美術館の登場による鑑賞形式の変容を、その背景として以前より指摘しているが、さらに今次の研究（とりわけ(1)）を踏まえ、以下の4点を付け加えたい。

- 写真の流通がもたらす視覚性の変容
- アカデミーによる技術教育の合理化
- 王政復古期の保守主義（検閲）
- モニュメントの流行

これら4点と、像表面へ向かう感受性の減退の関連は、これまで明確に指摘されることのなかった論点であり、研究代表者のオリジナリティの高い主張 = 近代彫刻史再考の方法呈示である。

(3) 近現代彫刻の表面論的記述の可能性

マルティーニにおける表面の「回復」
アルトゥーロ・マルティーニ作品の、とくに素材と表面の質感に関する実地調査をローマ、ヴェネツィア、トレヴィーゾの所蔵館においておこなった。結果、素材を写実に従属させず、表現主義・主観主義的な痕跡の媒体ともせず、その組成・性質を誇るヘドニズムにも陥らず、表面の変化・抑揚を重視する造形を維持・肯定するマルティーニの特徴が明らかとなった。

あわせてマルティーニの著作を分析。名著 *La scultura lingua morta*, 1945 においては、近代彫刻の不可能を語るが（とりわけモニュメントに依存する彫刻の様態を否定）、一方、同書執筆とほぼ同時期の G・スカルパとの対話では、むしろ表面の変化・抑揚を彫刻 *scultura* の枢要として主張している点を確認した。

つまり、マルティーニは、近代彫刻の閉塞に抗する契機として、実作・論述の両面で、表面の可能性を開いている。このことは、(2) において示した彫刻の近代化と表面の消失の関係を、逆の側面から支持・補強するだろう。

現代彫刻における反/脱モニュメンタルとしての表面

展覧会「白川昌生・小田原のどか 彫刻の問題」(2016) を企画し、モニュメンタルなものを回避しつつ、モニュメントを問う現代美術実践を紹介。白川と小田原の作品構造の表面性がはらむ批評的可能性を明らかにした（近代彫刻のクリシス：再現性・表現性・物質感に帰順することなく、たえず表層-移行的でありつづける制作活動の緊張-充実）。

また、ドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクト、ヴェネツィア・ビエンナーレ、リヨン・ビエンナーレ、シンガポール・ビエンナーレ等の調査を通して、モニュメント再検討をテーマないし動機とする作品の増加を確認。また、それらの展示の多くがアーカイヴ的な要素を取り入れ、鑑賞者の閲覧・参与を可能にしていた点も大いに注目された（モニュメントに対するインターフェイスの構築）。関連して、ロンドンおよびシンガポールにおいて、モニュメントの設置について調査を実施。ナショナリズムの先駆的事例（トラファルガー広場、ロンドン）と、後年のその展開（ラッフルズ像、シンガポール）、さらに、両者に対する現代美術の介入を俯瞰することで、モニュメントの近代性と、それに対する不断の批評行為の可能性を認識した。

現代彫刻における表面

その他、現代彫刻における表面（性）の主題化・重点化の事例を、上記の国際美術展に加え、あいちトリエンナーレ 2016 の出品作品

において確認した。また、同トリエンナーレ出品作家とは直接の意見交換の機会を多く持ち、作品表面のインターフェイス性（既定主題にも作者の主観にも、技術にも素材の組成にも解消されない、交換・交流の場としての表面）という認識を共有した。

また、展覧会「小沢剛 不完全-パラレルな美術史」(2018)に関連して、18世紀から現代にいたる石膏像受容における表面の捨象について研究をおこなった。

(4) 総合的な観点（研究成果の位置づけ）

本研究の成果を端的にまとめるならば、以下の通りである。

彫刻表面の効果に対する関心は、19世紀初頭、アントニオ・カノーヴァ作品の制作・受容においては非常に高かったにもかかわらず、その後継世代が引き受けなかったことを、実作と文献に即し確認。その原因として、1) プロト・モダニズムとしてのプリズモの伸張、2) 美術館・写真による新しいイメージ流通、3) アカデミーによる技術教育の合理化、4) 王政復古期の保守主義（検閲）、5) モニュメントの流行を指摘。この5点はその後も力点を変えつつ、近現代彫刻の条件・制約を構成することになる。それゆえに、近現代における表面への注目・関与は、これら5点への抗力を喚起・内包するものとして捉えることができるだろう。

言い換えれば、ロダンの制作を（肯定的であれ、否定的であれ）特権化する従来の彫刻史研究に対して、カノーヴァ以来の彫刻実践へと論点を拡張することで、モダニスト的歴史記述を乗り越え、現代の彫刻実践にも関わりうる有力なオルタナティブ、表面をめぐる彫刻史を呈示したことが本研究の成果である。

(5) 展望

本研究は、近現代彫刻史を統合的に記述・論述する基盤を、表面という観点に求めるものであったが、この論点を、いかに美術史学の外部に開き、学際性を獲得し、さらに彫刻論へのフィードバックを得るかが、今後の大きな課題である。これについて、現在、着手途上ないし検討中の研究領域は以下の3点である。すなわち、

建築論・映像論との接続

本研究においては、ポッツやパディエの先行研究を踏まえ、カノーヴァ彫刻の表面に、間主観的なインターフェイスとしての可能性を認めてきたが、同様に、主客の交換の場としての表面を論じるのが、G・ブルーノであ

る。表面を「関係の建築」と呼ぶブルーノは、「物質性を美学と技術と一時性との関係づける表面」「物質性の現われとしての表面」「媒介と投影の場としての表面」を論じつつ、「表面の厚みを再考することで、美術・映画・建築はミディウムを越えて繋がる」と主張する（G. Bruno, *Surface. Matters of Aesthetics, Materiality, and Media*, 2014）。こうした議論を敷衍しつつ、彫刻論の拡張を試みたい。

「白さ Whiteness」の人類学

バインドマンは、新古典主義彫刻内部での趣味の対立・移行（カノーヴァからトルヴァルセンへ）を論ずる際、二種の白の存在（Albus と candidus）を指摘し、合わせて近代の人類学的バイアスを示唆するが、この視点は、近代彫刻全般の表面-色彩-無色の問題を考える上でも、非常に示唆に富む。自律的な美学に支えられた芸術論・制作によって彫刻表面の観念化が進む時期と、端的に言えば、「白人」概念の構築が進む時期の同時性が問題の核心である。美学と人類学の混交がはらむ政治性の分析は、彫刻史研究においても極めて重要な領野である。慎重・確実に進めたい。

モニュメントの社会史

本研究においては、モニュメントの出現と表面の消滅の相関を指摘したが、モニュメント自体への関心は、近年、記憶の表象をめぐる研究に関連して、非常に高まっている。その研究動向の把握は、彫刻論・彫刻史の再検討を進めるうえでも不可欠の要素であろう。

一方、研究の全体像を呈示しうる成果公開や、個別の翻訳成果の出版も、今後、いそぎ進め、情報の共有、討議機会の確保・拡大に努めたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

金井直、「第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ（ジャルディーニ他、ヴェネツィア、2017年5月13日-11月26日）展評」、『ディアファネース』、4巻、2018、査読 無

〔図書〕（計6件）

小沢剛、荒木慎也、金井直、水沼啓和、『小沢剛 不完全-パラレルな美術史』、千葉市美術館、2018、pp.26-30.

白川昌生、金井直、小田原のどか、『彫刻の問題』、トポフィル、2017、pp.72-93.

港千尋、金井直他、『虹のキャラヴァンライ 創造する人間の旅』、平凡社、2016、

pp.26-28.

池田祐子、金井直他、『ウィーン 総合芸術に宿る夢』、竹林舎、2016、pp.466-480.

H・F・トルボット、青山勝、マイケル・グレイ、島山直哉、金井直、G・ペノーネ、『自然の鉛筆』、赤々舎、2016、pp.64-75.

C・シュヴィヨ、安藤智子、三谷理華、田中修二、金井直、島本英明『オーギュスト・ロダン(1840-1917)-複合的視点でとらえる-記録集』、静岡県立美術館、2016、pp.85-93.

〔その他〕

ホームページ等

シンポジウム「石膏像の歴史、その受容と展開」(千葉市美術館、2018年2月5日)パネリスト

シンポジウム「彫刻とエロス 目と手 で育むユニバーサル・ミュージアムの未来」(東海大学、2016年12月3日)パネリスト

金井直、「白川昌生「消された記憶」をめぐって」、『REAR』、36巻、pp.55-56、2016

6. 研究組織

(1)研究代表者

金井 直 (KANAI, Tadashi)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：10456494